

---

# 発達理論の学び舎

Back Number: Vol 165

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」

---



---

## 目次

- 3281. デカルトとスピノザが行うチェス
- 3282. 叡智が宿る場所
- 3283. 異国の地から
- 3284. 爽快なランニング
- 3285. 意思の表れとしての日記
- 3286. 表現行為について
- 3287. 大学院への出願準備と月旅行について
- 3288. 今道友信氏の『美について』より
- 3289. スザンヌ・クック=グロイターの論文の再読に向けて
- 3290. 認識論への関心の高まり
- 3291. 本日の読書計画
- 3292. レクティカの発達測定のユニークさ
- 3293. 「内省的抽象化」「階層的統合化」「階層的複雑性」について
- 3294. 永遠なる魂の表れとしての日記
- 3295. 印象的な二つの夢
- 3296. 誕生日だった今日
- 3297. 今朝方の夢について思うこと
- 3298. 誕生日のお祝いと老いの美
- 3299. 意識の発達段階と時空間の認識
- 3300. 新たな自己と新たな意識

---

### 3281. デカルトとスピノザが行うチェス

今日も十分な睡眠を取り、目覚めの瞬間に今日の一日の活動が充実したものになるという予感があった。時刻は午前八時を迎え、辺りはようやく明るくなった。今日は少しばかり空に雲がある。だが幸いにも、それは雨雲ではない。

ここ最近では自宅でヨガを毎朝行い、午後にも簡単に身体をほぐすようなことを行っていたため、ランニングに出かけることがめっきり少なくなっていた。また、この数ヶ月においては、オランダ国内旅行のみならず、国外に出かけていく旅行も多かったため、ランニングする機会が自ずから少なくなっていた。しかし今朝起きた時に、ランニングをしたいという思いが湧き上がってきたので、今日は昼食前に近所のノーダープラントソン公園へランニングに出かけようと思う。ゆっくりと、まるで走りながら座禅をするかのように走りたいと思う。

ランニングに出かけたその足で、久しぶりにインドネシア料理店に足を運んで昼食を購入し、チーズ屋にも足を運びたい。いかなる実践にも固有の価値と盲点があり、ヨガだけでは得られないものがランニングにはあり、ランニングだけでは得られないものがヨガにはある。そうしたことも踏まえて、今日は昼食前にランニングを楽しみたいと思う。不思議なことに、自分の脳が、そして身体と心がランニングを欲しているかのような感覚が今朝方にあった。

今朝方は印象的な夢を見ていた。一つは水泳をしている夢であり、自分の記録したタイムが相当に早かったようであり、水泳スクールの関係者が驚いていたような内容だった。

「平泳ぎでタイムを測定するはずだが、それはクロールのタイムではないか？」と確認されたほどだった。水泳に関する夢は細かくいろいろな場面があったが、今はそれらを覚えていない。

次に見た夢の場面は、チェスボードを眺めている夢だった。そこではチェスの試合が行われており、その対戦者がとても面白い組み合わせであった。対戦していたのは、デカルトとスピノザであった。デカルトが黒、スピノザが白の駒を用いていた。そこでなされていたのは確かにチェスなのだが、駒が全て竜の形をしていた。私は両者の対戦を固唾を飲んで見守っており、終始どちらが優勢なのかさえわからないような拮抗した知能戦がそこで繰り広げられていた。

---

どれほどの時間が経っただろうか。気がつくと、盤面には、デカルトの駒が一つ、スピノザの駒が二つあり、そこでデカルトが降参をし、スピノザが勝利した。

興味深いのは、対戦の始まりから終わりまで、盤面の側にはデカルトもスピノザもおらず、ただ駒だけが盤面の上を動いているということだった。しかし私は、その駒の動かし方そのものに、デカルトとスピノザの固有の思考方法を見て取り、対戦しているのがデカルトとスピノザであることがわかった。それは疑いようのない確信であった。

デカルトが用いた駒が黒い竜の形をしており、スピノザが用いた駒が白い竜の形をしていたこと。そして、スピノザが一つの駒の差でデカルトに勝利したことの意味は何なのだろうかという点に関して興味を尽きない。フローニンゲン:2018/10/18(木)08:30

### 3282. 叡智が宿る場所

早朝に空を覆っていた雲が随分と晴れ、ライトブルーの空が見えるようになってきた。ここ数日間の暖かさから変化があり、今日からは再び秋の涼しげな気候となる。今日の最高気温は15度とのことであり、明日以降も同様の気候が続く。フローニンゲンでの生活も三年目を迎えたが、この時期のフローニンゲンはもっと寒いものだと思っていたが、それほど寒くないことを嬉しく思う。

奇妙なことに、数週間前に暖房をつける必要がある日が何日か続いてきたが、本格的に寒くなり始めるのは、サマータイムが終了してからなのかもしれない。

書斎の窓から見える街路樹は紅葉が随分と進み、中にはすでに葉を落としてしまった街路樹もある。そのような街路樹たちを眺めていると、昨夜、闇夜から雫が一滴落ちてくるかのような感覚があったことを思い出す。そこからさらに、昨日の明け方に見ていた夢について思い出していた。巨大なビルが現れるあの夢についてである。

あの夢に現れた巨大なビルは、もしかしたら知の巨大な建築物なのではないかという考えが突如芽生えた。だが、夢の中でのそれはどうも叡智と呼べるようなものではなく、文字通り、知の構築物であった。ビルに近づいた時、ガラガラと光る明かりが灯されていたことを思い出す。あの光は何だっ

---

たのだろうか。それは知識の持つ肯定的な作用と否定的な作用の両側面を象徴するようなものだったと言えるかもしれない。知識と叡智の大きな違いについて考えを巡らせる。

知識はそれを活用する際に、正しく活用することも、誤って活用することもできる。言い換えれば、知識には善悪のどちらかに転がり落ちる可能性が内包されている。一方、叡智は誤りようがないものなのではないかと思う。つまり、叡智には悪に転がり落ちるような側面を持っておらず、仮にそうした側面を持っているのであれば、それは叡智ではなく、知識の範疇に留まる。

叡智は必ず、社会善を実現していくものであり、社会悪を育むようなものではないのだという考えが生まれた。その考えに基づくと、やはりあの巨大なビルの薄気味悪さは、それを構成しているものが悪に転がり落ちる可能性を内包した知識であったからなのではないかと思う。

もう一つあの巨大なビルが象徴することについて思うことがあった。今の私はおそらく、巨大な知の建造物の頂上に向かっていこうとする衝動を持ち合わせている。確かに私の日常生活において、それは純粹無垢な探究意欲として現れているが、それは自分を知の建築物のてっぺんへ向かわせようとするエネルギーであることは間違いない。

ここで昨日ふと思ったのは、そうした知の巨大な建築物の頂上に向かっていく衝動を抑えることはできないが、ひとたび頂上のような地点に辿り着いたら、そこから地上に向かって飛び降りる必要があるのではないか、ということだった。ひょっとすると叡智というのは、バベルの塔のてっぺんから地上に向かって飛び降り、着地した先の地上にあるのではないだろうか。それは決して最初から地上にあるのではなく、バベルの塔の頂上まで登り、そこから塔そのものを破壊するような勇気を持って、てっぺんから飛び降りた先の地上に宿るようなものなのかもしれない。フローニンゲン:2018/10/18(木)08:49

### 3283. 異国の地から

今日は無性に和書が読みたい。ここ数ヶ月間、和書から離れており、自分の心身と存在そのものが英語空間の中に浸りきっていたように思う。そうしたさなかにあって、自分が執筆する日記だけが日本語空間に触れる唯一の機会であり、今日はふと、久しぶりに和書を旺盛に読みたいという思いが芽生えた。

---

今日は英語の論文や書籍を読むことをなんとか控え、それらを読みたいと思う衝動をあえて抑えるようにしたい。その代わりに、逆の衝動として芽生えている、和書を読みたいという衝動に純粹に従っていく。

今日は、小林秀雄、森有正、辻邦生の三名の文章を読み進めていく。フローニンゲンの自宅に置かれている和書の執筆者はごく限られており、その他には井筒俊彦、福永武彦、吉田秀和がいるぐらいである。

いつか自分は日本語だけを用いてモノを考えていく日がやってくるのだろうか。そのことを昨日も考えていた。

これから再び大学院に戻り、哲学の探究を進めていく際に、そこでは母国語ではなく外国語を用いることが要求される。言葉を扱いながら一つ一つ思考を深めていくことが哲学の探究には要求されるが、果たして自分はどこまでそれを外国語で行えるのだろうか、という問いと直面している。いっその事、日本語で哲学探究をした方がいいのではないかという考えが脳裏によぎったが、どうもそのような単純な問題ではないらしい。日本語と英語の双方を用いながら考え続けていくこと。それはどこか自分の人生の宿命のように思えてくる。

今朝もまた、果たして自分は日本に戻る日がやってくるのだろうかということを考えていた。それは一時帰国という形ではなく、日本に定住するという意味においてである。以前までは数十年後には必ず日本に戻ろうと思っていた。しかし、このところ思うのは、もしかすると日本で生活を送ることはもうないのかもしれないということである。

母国に関与をしていく際に、自分が日本にいる必要はなく、むしろ日本にいることによって自分は母国に何も関与できなくなってしまうのではないかという考えが芽生えている。米国での四年間の生活を終えた後に一年間ほど日本で生活していた時に感じていた、何とも言えない寂寥感のようなものを思い出す。

確かに今後の人生がどのように進んでいくかは誰にもわからない。そのため、日本で生活する日がやってくるかもしれない。ただし今の私には、それは遥か彼方の現象であるように思えて仕方ないのである。

---

---

今日は和書を旺盛に読み進めていくが、その時に最優先されるべきは、フランスの地で客死した森有正先生の日記だろう。森先生のみならず、異国の地で長く生活を受け、その地で人生を終えた人物には、私を強く惹きつける何かがある。今書齋の中で流れている音楽を生み出したショパンもまさにそうだ。フローニンゲン:2018/10/18(木)09:06

### 3284. 爽快なランニング

全身を動かす喜びを思う存分に味わうような時間だった。今日は昼食前に、近所のノーダープラントソン公園へランニングに出かけた。この数ヶ月間は、様々な旅行が重なり、気がつけばランニングをすることがほとんどなくなっていたのだが、今日は久しぶりにランニングに出かけた。早朝に起床した際に、今日は必ずランニングに出かけようという強い気持ちが表れていた。

ランニングに出かけてみると、足取りは非常に軽く、ここ数ヶ月間ランニングから離れていたことが嘘のようであった。ランニングをしない期間においても、近所のスーパーまではジョギングをする習慣があったことが、心肺機能を一定のものに保つことに役立っていたのかもしれない。

今日のランニングを通して、改めて全身を動かすことの大切さ、及びその喜びを大いに実感することになった。極端な考えとして、運動のない人生は人生ではないというものが浮かんできた。それぐらいに、適度な運動を日々の生活の中に組み入れることは大切だ。感情も思考も全て、脳と身体と密接に関わっており、内的現象は全て身体を通じた内的運動だとも言える。その際に、身体そのものが涵養されていなければ、内的運動は不健全なものに陥ってしまうだろう。

不思議なことに、ランニングをしていると、気分がどんどんと明るくなり、自分の中で若さが一層養われたような気がした。気分が明るくなることに関しては、それに類する科学的な研究結果が多数存在しており、その確からしさを今日の自らのランニング体験を通して感じた。

ランニングの際に立ち寄ったノーダープラントソン公園は、気が付かない間にすっかりと秋が深まっている様子だった。落ち葉がたくさん落ちており、それを踏みしめる音を聞きながら公園内を走っていた。ランニングの帰り際に、街の中心部の行きつけのインドネシアン料理店とチーズ屋に立ち寄った。いつも思うが、ランニング後にそれらの店に立ち寄る際には、気分が高揚しているためか、店主たちとの会話が自然と弾む。

---

つい先ほど、購入したインドネシアン料理を食べ、これから午後の取り組みに従事していく。ランニングをしたおかげで、心身及び脳がとても活性化されているのを実感する。ランニングはやはり、少なくとも週に一回は行うようにしたい。以前の習慣に再び戻りたいと思う。午後から就寝までの探究活動及び創造活動がとても充実したものになると予感する。フローニンゲン:2018/10/18(木)13:40

### 3285. 意思の表れとしての日記

平穏な雰囲気が出迎えている今日のフローニンゲン。季節はもうすっかりと秋なのだが、今日は桜の風が吹いてきそうな雰囲気である。特にそれは早朝の時間帯においてそうであった。

今はあいにく雲が空を覆っているが、それでも穏やかな雰囲気であることには変わりない。先ほどランニングから自宅に戻ってくる最中に、小鳥の群れが木々を次から次に移動していく姿を見た。小鳥たちが鳴き声を発しながら木々を移動していく様子を眺めながら、その行動の意味することは何なのかを考えていた。私は動物行動学者ではないから、小鳥たちの行動の意味は皆目見当がつかなかったのだが、とても興味深い集団行動をしていると思った。

実は今も、書斎の窓の外には、小鳥たちが右から左へ、左から右へ移動していく様子が時折見られる。紅葉の進んだ木々にやたらと止まるものだから、木の実でも食べているのかと想像をしてみた。

ランニングをしている最中に、自分が日々執筆している日記は、確かに日々の思考や感覚の足跡を残すためなのだが、それ以上の意味があるように思えた。それは端的には、日記は自らの意思の表れに他ならないのではないか、というものだった。

日々執筆している日記に関しては、もう少ないとか多いとか、量に関して問題にすることはほとんどなくなった。質に関してもそうだ。それについてもほとんど気にかけていない。重要なことは、そこに自らの意思が表れていることであり、意思さえ形となっていれば、量や質など問題ないことに気づかされた。ちょうどいつも足を運ぶスーパーに行く途中の橋を渡ったところで、そのような気づきが得られた。自分が綴る日記は自らの意思の表れであること。それを忘れないようにして、これからも日記を書き続けていく。

---

午前中、読書を進めながらふと、作曲の勉強と実践、そしてシュタイナーの思想及び霊性発達の探究が、いつか自分の生活の核になるだろう、ということを使った。今は作曲の勉強に関してはほとんどできておらず、単に実践があるだけだ。理論について学習することは本当に少なくなった。というよりも、これまでもほとんど理論について学んでいないように思う。

理論を学ぶ必要性は痛感していながらも、そして確かに理論書を何冊か読んできたが、それらは学びのうちに入らない。作曲の勉強を本格的に行い始めるのは数年後からになるかもしれないが、今からでもできることは少しずつ行っていく。特に、フーガの技法について勉強を再開させようと思う。アルフレッド・マンが執筆した“The Study of Fugue (1958)”を読み返すために、ソファの上に積まれていた本書を、書斎の机の右隅に積み重ねられた書籍の上の方に置いた。今週末の土日に、それらを最初から読み返し始めようと思う。

シュタイナーの思想に関しても、深く学びたいという思いがありながらも、今はその他に学ぶことが多く、シュタイナーの思想を学ぶことに時間が充てられていない。だが、この探究項目に関しても、近い将来に必ずシュタイナーの思想を深く学ぶ日がやってくることを予感している。フローニンゲン：  
2018/10/18(木) 13:54

### 3286. 表現行為について

今朝、六時半あたりに起床してみると、随分と室内が寒く感じられた。起床してすぐに天気予報を確認してみると、外気が3度ほどまで下がっていることに気づいた。数日前までは秋にしては暖かい日が続いていたため、その差によって今朝の寒さがよりいっそう強く感じられた。今日からはもう、最高気温が15度に満たない日が続いていくようだ。季節がゆっくりと冬に向かっていくのを実感する。

昨日は久しぶりにランニングをし、随分と爽快な気持ちになった。改めて心身一如であることを知る。週に一度は必ずランニングをするようにし、ヨガの実践は毎日継続していく。とにかく身体から全てを始めていくこと。適度な運動と栄養のある食事、そして良質な睡眠。これら三点がなければ、充実した探究活動と創造活動を日々行っていくことはできないだろう。どれか一つが欠けてはならず、それら全てを一つの生活実践として徹底していく。

---

今日はこれから早朝の作曲実践を行うが、その際にはハイドンに範を求めようと思う。午後にはモーツァルトに範を求め、夜はバッハの曲を参考にする。

昨日改めて、ハイドンとモーツァルトの曲を大方参考にしたら、やはりバッハに戻っていかうと思った。究極的にはバッハに行き着くのだろう。そのような思いから、昨日は久しぶりに、バッハの曲を聴きながら、該当曲の楽譜を目で追って確認することを行っていた。バッハは本当に汲み取ることの多い偉大な作曲家であると思う。

そこからは、表現するということについて考えていた。表現するということが、仮に語源通りに、自分の内側のものを絞り出し、形を生み出していくことであるならば、英語で論文を執筆していくことは、まさに自分にとって重要な表現行為だと言えそうだと、ということに気づいた。

英語でものを考え、それを文章にしていくことは、内側のものを絞り出し、それを造形していくという感覚がいつもしている。そうした点において、英語で論文を執筆することは、自分にとって大切な表現行為の一つなのだということを再認識した。この再認識が、再び学術機関に戻ろうとしている自分の心を後押ししている。やはり私は日本語のみならず、英語でも文章を執筆したいのだろう。

どちらの言語も私にとって大切であり、両者は共になくてはならないものだが、英語で文章を執筆する際の構築的な感覚は独特だと思う。今はまだ未定であるが、博士課程に進学することをこの先選択したら、その時には、英語で論文を執筆していくという表現行為の意義を今よりも強く実感しているに違いない。フローニンゲン:2018/10/19(金)07:18

#### No.1354: Night after the Rain

I spent time today with a sense of fulfillment. I expect tomorrow to be the same as today with full of satisfaction. I'll go to bed in a meditative way. Groningen, 20:15, Saturday, 10/27/2018

#### 3287. 大学院への出願準備と月旅行について

昨夜ふと、米国の大学院の出願に関して、応募締め切りよりも随分と早い段階で出願を済ませようと思った。例えば、出願が決まっているハーバード大学教育大学院(HGSE)は、来年の一月の最初の週の金曜日が出願の締め切りとなっている。おそらく多くの志願者は締め切りの数日前か前日、

---

あるいは当日にオンラインアプリケーションを提出するのだと思うが、私は早めに出願を済ませておこうと思った。というのも、現時点で出願に向けた書類のほぼ全てが揃っており、あとは志望動機書を最終版にすることと、三名の推薦者に推薦状を提出してもらうことだけが残っているにすぎないからだ。

その他の必要な書類に関しては、すでにオンライン上にアップロードしている。もちろん、記入漏れや記入の誤りがないかを念入りに確認しようと思うが、応募の締め切りよりも二、三週間ほど早く出願を済ませようという考えが昨夜浮かんだ。

今回の出願に関しても随分とゆっくりと準備を進めているが、動き出すのが早かったこともあり、準備が早い段階で完了の方向に向かっていることを嬉しく思う。HGSEに関しては、過去に博士課程のプログラムに二度ほど出願したが、その際は全て不合格になっている。

今年の九月まで在籍していたフローニンゲン大学に関しても、入学するまでに二度ほど不合格になっていたことを思い出す。フローニンゲン大学に関しては、三度目の出願の際に合格となり、それと同じことが今回のHGSEの出願に際しても起こるかはわからないが、良い結果が得られればと思う。

フローニンゲン大学に合格した時と同様に、今回の出願資料は過去の出願資料よりも随分と練られたものになっている。仮に今回HGSEから良い知らせが届かなければ、もうこの大学とは縁がなかったのだと思う。フローニンゲン大学とは三回目の出願の際に縁が結ばれた。HGSEに関しても同様のことが起こってくれることを願う。

辺りはまだ闇に包まれているが、遠くの空がダークブルーに変化し始めた。ここから一時間以内で夜が明けるだろう。

昨夜は夜空に浮かぶ月をぼんやりと眺めており、月へ旅行に出かけてみたいとふと思った。その時の私は、身体は地球にありながらも、意識は月にあるような感覚がしており、まるで月から地球を眺めているかのような感覚があった。自分が住んでいる地球という惑星を、一度実際に自分の目で客体視することが大切なように思えてくる。現在世界で起こっている政治経済的な様々な事柄は、どう

---

も地球という惑星そのものを客体視するような意識が欠落しているからではないかという考えが芽生える。

確かに、発達理論の観点からも、そうした意識を涵養するのは極めて難しいのだが、一度地球を外から眺めるとい直接体験をすれば、もう少し人々の意識は拡張されるのではないかと思ってしまう。そのようなことを昨夜考えていた。

月へ旅行に出かけることは、どうやら非現実的な話ではなくなっているようであり、近い将来に民間人でも月に行けるようになる日が来るかもしれない。昨夜、月から地球を眺めていた感覚がまだ自分の内側に残っているかのようだ。フローニンゲン:2018/10/19(金)07:37

#### No.1355: A Refreshing Morning

There are no clouds in the sky this morning. It makes me convince that today will be fruitful.

Groningen, 08:16, Sunday, 10/28/2018

#### 3288. 今道友信氏の『美について』より

今朝は朝焼けがとても綺麗だった。空に浮かんでいる雲が薄赤紫に輝いていて、その光景には恍惚とさせる何かがあった。刻一刻と色彩を変えていく雲を眺めながら、午前中の仕事に取りかかっていた。

今日は昨日に引き続き、和書を読んでいた。昨日は、森有正先生の日記を読み、今日は今道友信氏の『美について』を読み進めていた。後者の書籍については、過去に何度も目を通してはいるのだが、今日も考えさせられることが多々あった。

今道氏の説明を読みながら興味深く思ったのは、孔子の芸術哲学において、芸術が学問以上に高い位置を占めていたことだ。とりわけ、言語芸術(詩など)は象徴の力によって、定義することのできない事柄、つまり学問では分け入って行くことのできない事柄に光を当てていくことができるとしている。これはハーバード大学教育大学院の教育哲学者キャサリン・エルギン教授が述べていることにつながる。芸術認識は、科学的な認識とは異なるものがあり、認識論の観点からも、そこに芸術の一つの価値がありそうだ。科学では認識することのできないものを芸術を通じて認識していくこと

---

が可能であるという点に、芸術の意義を改めて見出す。この点は、自分の実生活を振り返ってみると非常に納得がいく。

先日改めて、教育哲学の中でも、芸術教育の哲学に焦点を絞って探究を進めていこうと思った。そう思った矢先に、“The History and Philosophy of Art Education (1970)”という書籍が届いた。本書は近日中に初読を開始しようと思っている。この書籍は、西洋の芸術教育の歴史と哲学に焦点を当てており、その根源にはプラトンの芸術教育哲学がある。それを学ぶことに並行して、ぜひとも孔子の芸術教育哲学の理解も深めていきたいと思う。

プラトンも孔子も、教育における音楽の役割を強調していた。孔子はまさに、「詩において興り、楽において成る」という言葉を残しているように、言語芸術によって超越的な認識能力が喚起され、音楽によって人間は完成すると考えていた。私自身が音楽を愛するということが相まって、二人の芸術教育哲学は強い関心を引き起こす。

両者の教育思想は個人に対する教育のみならず、社会的な教育までも見据えたものだった。今道氏が指摘するように、意思に関わらず聞こえてくる音楽の調性が、無意識のうちに一般大衆の性格形成に影響を与えるという社会心理学的な作用を見過ごすわけにはいかない。

詩と音楽、そして芸術には、どうやらこれまでの自分が考えていた以上の社会的な意義と機能があることが見えてくる。今道氏の美学、さらには芸術思想についてより深く理解したいと思うようになり、今度日本に一時帰国した際には、今道氏の書籍を何冊か持って帰ろうと思う。フローニンゲン：

2018/10/19(金) 11:20

#### No.1356: Waves at Twilight

It's 4:30PM now. Looking at the glowing sunset, I'm feeling a calm emotional energy that looks like waves. Groningen, 16:29, Sunday, 10/28/2018

#### 3289. スザンヌ・クック=グロイターの論文の再読に向けて

先ほど買い物に出かけた時、日が出ているにもかかわらず、随分と冷え込んでいることを感じた。外で見かける人は一様にジャケットを羽織っていた。秋がぐっと深まったような感覚がする。

---

---

今日は午前中に作曲実践を行い、昨日に引き続き、和書を読み進めていた。午前中に読んでいたのは、小林秀雄全集であり、今日はこれから作曲実践を再び行った後に、森有正先生の日記を読み進めていこうと思う。

昼食後に、協働者の方とオンラインミーティングを行い、そこで高度な発達段階の特性を深く理解することの重要性を話し合った。その場に出された意見に私は強く同意し、協働者の方たちとこれから何回かに分けて、高度な発達段階の特性について理解を深めていく勉強会をすることになった。

今のところ取り上げることを予定しているのは、スザンヌ・クック=グロイターの論文“Nine Levels Of Increasing Embrace In Ego Development: A Full-Spectrum Theory Of Vertical Growth And Meaning Making (2013)”である。それは97ページほどの分量があり、協働プロジェクトについての話し合いも適宜行っていく必要があることを考慮して、四回に分けてその論文を読んでいくことにした。来週の月曜日に細かいカリキュラムを作っておきたいと思う。

いかんせん文献が英語であり、英語に馴染みのない方も多であろうから、読むべき箇所と読解するポイントを示し、さらには読解の手助けになる問いに関してもこちらで用意しておこうと思う。そうした最低限のポイントと問いを抑えていただければ、あとは自由に当該論文を読み進めてもらえればと思う。

初回に関しては今のところ、構成主義的発達理論の概要とその背景、そしてそもそも、クック=グロイターと他の発達論者との関係について説明しようと思う。それに加えて、クック=グロイターの理論モデルで言うところの前慣習的段階の特徴まで扱えればと思う。その流れを受けて、第二回では慣習的段階の特徴を扱い、第三回では後慣習的段階のうち、段階5までを扱っていく。段階5/6と段階6については別途回を設けた方がいいであろうから、それは第四回に扱うことにする。各回で扱う大まかな内容なそのようになるだろう。

クック=グロイターの論文を真剣に読み直すのは数年振りであり、この機会に私も深く論文を読み返そうと思う。ちょうど来週にフローニンゲン大学に立ち寄る機会があり、そこでこの論文を含め、いく

---

つか印刷する予定だった論文を印刷したい。本日まで集中的に和書を読み、来週からは再び英語空間の世界に浸るという日常に戻るだろう。フローニンゲン:2018/10/19(金) 16:04

### 3290. 認識論への関心の高まり

時刻は午後の八時半を迎え、辺りはすっかりと暗闇に包まれた。今日は一日を通してとても気温が低かった。本格的に秋が深まったことを実感する。そうこうしているうちに、すぐに冬がやってくるだろう。そしてこの冬は来年の五月半ばまで続くということを忘れないようにしたい。

これからやってくる長い冬に対して、精神的な次元での準備はもう整っている。身体に関する準備も整っていると書いてもいいだろう。この長く陰しい冬の後には、新たな自己が姿を見せるであろうことを予感する。

今日は協働関係の仕事があったため、一日に三曲作ることは難しかった。結局三曲目を作るのではなく、最後に日記を執筆することによって本日を締めくくろうと思う。

午前中に今道友信氏の書籍を読むことによって、認識論の観点から芸術教育の意義について探究を深めていくのは筋が良さそうだという直感があつた。何より、今月の初旬にハーバード大学教育大学院を訪れた際に、キャサリン・エルギン教授のクラスを聴講し、認識論そのものに関心が向かっていたことを見逃すことはできない。

エルギン教授のいくつかの論文を読み進めていくと、今日得られた直感を支えるような論点があつたのを思い出す。具体的には、芸術に固有の認識の仕方を認識論によって明らかにし、その固有の認識方法の意義をもって芸術教育の大切さを論じていくという論理の流れである。この論理の流れに関して、自分なりの観点や具体例を交えながら、自分独自の考えを育むことができたらと思う。

来週の木曜日にフローニンゲン大学のキャンパスに立ち寄った際には、エルギン教授の論文を数本ほど印刷する予定である。それらの論文と、以前に一読を終えたエルギン教授の最新刊“True Enough (2017)”を再読し、グッドマンとの共著である“Reconceptions in Philosophy and Other Arts and Sciences (1988)”の初読を進めていきたいと思う。

---

芸術教育の意義を考察していく際に、これまでの自分の専門である発達心理学の観点だけでは不十分であり、認識論や批判理論などに習熟することによって、自分なりの思想を育むことができたと思う。とりわけ認識論に関しては、日々関心が高まるばかりである。

昨日ふと、自分の考えの中に耐えず誤謬性が含まれているということ自体が、発達の原動力なのではないかという考えが芽生えた。自分の内省も、他者との対話にも誤謬性が必ず含まれているからこそ、その誤謬性を正し、新たな認識を得ようとする運動が始まるのではないかと思う。逆に言えば、誤謬性を排除しようとするような発想は、発達を停滞させてしまうのではないだろうか。科学の発達に関しても、その科学研究に反証可能性があるかどうかは極めて重要であり、そうした反証可能性、つまり誤謬性が入り込む余地が確保されて初めて、発展・発達というものが起こりうるのだと思う。誤謬性というのも認識論の扱うトピックであることを踏まえると、ますます認識論への関心が高まる。

フローニンゲン:2018/10/19(金)20:39

### 3291. 本日の読書計画

今朝は五時過ぎに起床した。昨夜の就寝が十時前であったことが、今日の早起きにつながったのかもしれない。一日の仕事を無事に終えたならば、そこから新しいことに手をつけるのではなく、速やかに就寝するというのは早起きにつながるように思う。今日からその点を意識しようと思う。その日になすべきことを終えたら、そこで速やかに就寝に向かうこと。それを新たな習慣としたい。

五時過ぎに起床してみると、室内の温度が随分と下がっていることに気づいた。昨日と似たような朝の気温であり、確認してみると、外気は4度とのことである。フローニンゲンは随分と冷え込んできた。比較として、先日訪れたボストンの気温を確認してみると、十月の前半においては、ボストンの方がフローニンゲンよりも暖かかったのだが、その関係が逆転している。ボストンの方がもう随分と寒くなっているようだ。

今日は土曜日ということもあって、今の時間帯はなおさら静かだ。そうした静かな環境の中で、今日の取り組みを始めたい。今日は早朝に、バッハの四声のコラールに範を求めて作曲実践をする。四声のコラールを参考にしながら曲を作ることは、どこか詰将棋を解くような感覚がする。そうした感覚を引き起こすのは、おそらくバッハの曲が持つ構築性なのだと思う。

---

バッハの曲を参考にして一曲作ったら、そこからは読書に励みたい。具体的には、成人発達と成人学習に関する“Handbook of Adult Development and Learning (2006)”の残りの章を今日の午前中には読み終えたいと思う。本書の再読に関しては、数日前に終えておこうと思ったが、他の書籍を読むことをしていたため、今日まで再読が伸びた。本書からは得るものが多く、今日もメモをしながら再読を進めていくことになるだろう。

本書を読み終えたら、リルケの詩集“Rainer Maria Rilke: Selected Poems (2011)”を読み始める。本書は随分と前に、マラルメの詩集と合わせて購入し、マラルメの詩集を読んだ後にすぐにこちらの書籍に取り掛からなかったため、随分と時間が経ってしまった。

今日は久しぶりに詩の世界に入っていこうと思う。リルケの詩集を読み進めたら、先日街の古書店で購入した書籍の中の一冊である“Realism in Education (1969)”を読み始めようと思う。こうした読書を進めていき、昼食前には再度作曲実践を行うかもしれない。それは午前中の読書の進展を見て判断しようと思う。

午後からも引き続き読書を進めていき、その際にはフーガの技法に関する書籍“The Study of Fugue (1958)”を再読しようと思う。フーガの技法を学ぶには、バッハの楽譜を参考にしながら実際に曲を作っていくことが一番勉強になると思うが、アルフレッド・マンの本書から得ることも多いだろう。フーガの技法に関する新たな観点を得るために、今日は本書を再読したいと思う。本日はまだ始まったばかりだが、今日がとても充実した一日になることをすでに予感している。フローニンゲン:2018/10/20(土)06:07

### 3292. レクティカの発達測定ユニークさ

時刻は午前八時半を迎えた。今日は五時過ぎに起床したおかげもあり、早朝の作曲実践から始まり、すでに読書も順調に進んでいる。つい三十分ほど前に、とても幻想的な夜明けを見た。

今日は薄暗い雲が空の所々にあるためか、普段見ている朝焼けとは異なる光景を見ることができた。どこか深い森にいて、森の隙間から太陽の光りが差し込み、辺りを赤茶色に染めるような夜明けだった。先ほど、小鳥の大群が自己組織化をして空を移動している姿を見た、その様子は何とも言えない美を持っていた。無数の鳥が一つの隊列をなし、西の空に消えていった。

---

---

早朝に、久しぶりにセオ・ドーソン博士の論文を読んだ。ドーソン博士は、私が以前在籍していたレクティカの創設者であり、彼女の論文を読むことは最近ほとんどなかった。確かに、私はレクティカの開発したアセスメントの価値を認識し、そのアセスメントは発達心理学の長い伝統に裏打ちされた優れたものだと思う。今でも日々それは絶えず進化を遂げていることを知っている。しかし、今の私はアセスメントそのものにはもはや関心はなく、むしろアセスメントを取り巻く思想空間の方により関心があると言った方がいいだろう。今朝方は、今読み進めている論文集の中にドーソン博士の論文があったため、それを読もうという気になった。

おそらく初読は数年前のことであり、今久しぶりにその論文を読んでいる。改めて、レクティカのアセスメントが稀有な点は、言語学に基づくアセスメントや既存の発達測定にはないアプローチでアセスメントを開発していることだ。それは端的には、言語の階層的複雑性(hierarchical complexity)と言語内容を分け、同時にそれらの連関を明らかにしていることである。正直なところ、単に階層的複雑性を明らかにするというのは、コールバーグ、キーガン、ラスキー、バサチーズ、クック=グロイターなどのアセスメントでも行なわれていることである。つまり、記述された内容と記述内容を生み出す構造特性を分離することは、既存の多くの発達測定でなされていることである。だが、レクティカのアプローチでユニークな点は、そうした構造特性を明らかにした後の処理にある。

既存の発達測定とは異なり、レクティカでは、明らかになった構造特性と、分離された記述内容との照らし合わせをもう一度行うのである。このプロセスを挟むか否かが、大きな違いである。厳密には、記述内容に関しても、テーマの種類(文脈)、文法的な複雑性などの細かな特徴を見ていく。それらの細かな特徴と階層的複雑性がどのような関係になっているのかを調べ、その調査結果を測定に組み入れている点がレクティカの手法のユニークさである。ドーソン博士の論文を読みながら、改めてその点を認識した。引き続き、メモを取りながら、さらにはこうした備忘録を書きながら、今日の読書を進めていく。フローニンゲン:2018/10/20(土)08:44

### 3293.「内省的抽象化」「階層的統合化」「階層的複雑性」について

午前十時を迎えると、早朝に空を覆っていた薄黒い雲がどこかに消え去っていることに気づいた。今は薄い青空が広がっていて、穏やかな朝日がフローニンゲンの街を包んでいる。今日は休日と

---

ということもあってか、辺りはとても静かだ。フローニンゲンの休日を象徴するような雰囲気滲み出ていることに気づく。

今日は早朝から室内が冷えており、ヒーターをつけざるをえなかった。今、少しずつ部屋が暖かくなっている状況の中で、これから昼食までの取り組みを行っていきたいと思う。具体的には、リルケの詩集を読み、ハイドンに範を求めて作曲をすることである。昼食後には過去の日記を編集し、仮眠を取った後に、教育哲学に関する書籍を読み進めていく。

つい先ほど、“Handbook of Adult Development and Learning (2006)”の残りの章を読み終えた。今回の再読も実り多く、数多くのメモをノートに書き留めながら考えを深めることができた。

人間発達に関する自分の考えはゆっくりとだが、着実に育まれていることを実感する。ここからは本当に、思想的な探究を真剣に行っていくことを改めて自らに誓いたい。

自分の関心テーマを探究するために必要な哲学領域が何かが徐々に明らかになってきており、当面は認識論と批判理論の双方の書籍を数多く読み進めていくことになるだろう。そしてできれば、それらの哲学領域を専門とする師を持ち、彼らとの対話を通じて自分の思想を育てていくようにしたい。来年また大学院に戻ることの意義はまさにそれを行うためだろう。

早朝の日記の中で、レクティカの創設者であるセオ・ドーソン博士の論文を読んでいたことを書き留めていたように思う。その論文を読みながら、改めていくつかの概念について考えていた。

ピアジェは「内省的抽象化(reflective abstraction)」という概念を提唱しており、これは何を意味しているかという、現在の発達段階の思考や感覚は無意識的に生起するが—この点において、“reflective”は「反射的」とも言える—、それを客体化(抽象化)することによって、私たちは次の発達段階に向かっていくことを指している。そしてその結果として生じるのが、これまでの段階の思考や感覚が一段高い次元でまとめ上げられる「階層的統合化(hierarchical integration)」という現象である。さらには、この階層的統合化は発達のプロセスの中で継続して起こり、それが階層構造を生んでいく。それを「階層的複雑性(hierarchical complexity)」と呼ぶ。

---

レクティカを含め、発達心理学の枠組みに基づくアセスメントは、ある領域内における階層的複雑性に焦点を当てていることは、先ほどの日記で述べたとおりである。だが、先ほどの日記の中では、階層的複雑性というものがそもそも何かについて書き留めていなかったもので、ここでそれについて言及しておく。

改めて私が興味深く思っていたのは、現在の発達段階で無意識的に生じる思考や感覚をある時何かしらのきっかけで内省できるようになり、これまでの思考や感覚を一段高い次元でまとめ上げられる力が私たちの内側に存在しているということだ。さらには、そうした力によって生み出された構造が階層構造をなすという点も改めて興味深いと思う。フローニンゲン:2018/10/20(土)10:25

### 3294. 永遠なる魂の表れとしての日記

時刻は午後の四時を迎え、夕方の落ち着いた雰囲気はフローニンゲンの町を包んでいる。午前と午後の双方において、読書を進めている最中にふと、美学や芸術教育の哲学に関する書籍を持って世界中を旅行し、各地の様々な美術館を巡る自分の姿が脳裏に浮かんだ。その姿が喚起されると、そのようなことが実現されているわけでもないのだが、そこに充実感を見出している自分がいた。人間の想像力には不思議な力が備わっており、こうした自分の感情と密接に結びついた心象イメージは本当に実現するかもしれない。

早朝と昼食前に作曲実践を行い、すでに二曲ほど作曲をし、今日は読書に加えて日記の執筆もいつものように行っている。先ほど日記について考えを巡らせていると、確かに私は日記をウェブサイト上で公開しているが、それは誰かに読んでもらうことを意図しているというよりも、インターネットという情報空間の中に自分の生命を移植している行為のように思えた。

私が生まれた時にはすでにこの世を去っていた森有正先生の日記に対して、それが執筆された60年後に私に多大な影響を与えることがあるというように、確かにウェブサイトで公開している日記は、50年後、100年後に自分と似たような魂を持つ人に向けて書き残していると言うことができる。ただしそれは、書き残していったものが生み出す偶然の産物のような出来事に過ぎないだろう。一方で、ウェブサイトに自分の書いたものを記号情報として残しておくというのは、永遠性を希求する人間の性の現れなのかもしれないと思った。

---

書き手はいつかこの世を去るが、書いたものはこの世を去らない。もちろん、書いた書籍などが絶版となり、無数の書籍の中に埋もれてしまうことや、インターネットが崩壊することによって、情報が消失する可能性などはなくはないが、膨大に書き残していったものは何らかの手段でこの世に残り続けるのではないかという思いが強くなる。

これまで無意識的に日記を毎日ウェブサイトで公開記録していたが、その背景には、永遠を求める魂の特性があるのかもしれない。いや、別の見方をすれば、永遠である魂の表れの行為としてそれがあるのかもしれない。そのようなことを考えていた。

先ほど教育哲学に関する書籍を読み終えたので、今日はこれから、当初予定していなかったが、キャサリン・エルギン教授とネルソン・グッドマンの共著である“Reconceptions in Philosophy and Other Arts and Sciences (1988)”を読み始めたい。一時間ほど本書を読んだら、モーツァルトに範を求めて本日三度目の作曲実践を行う。夕食後には、メールの返信をし、今日も早めに就寝するようにしたい。フローニンゲン:2018/10/20(土) 16:08

### 3295. 印象的な二つの夢

今朝は六時を少し過ぎた頃に起床した。今は午前七時を迎えようとしているが、辺りは真っ暗のままである。昨日から随分と冷え込むようになり、日中の最も気温が高くなる時を除いて、ヒーターをつけていた。就寝前にもヒーターを入れ、室内を暖かくしながら眠りについた。

今朝方の夢について今思い出している。大きく分けると二つの夢を見ていた。一つは、小学校時代に通っていたサッカースクールのグラウンドで、友人たちとサッカーに興じていた夢である。双方のチームの力が拮抗するように編成をしたにもかかわらず、試合が始まってみると、私たちのチームは随分と劣勢だった。

試合が始まって比較的早い時間帯に、すでに四点ほど点を取られてしまった。チームの士気が随分と下がっていることを感じた私は、ここで得点を入れる必要があると思い、相当強引ながらも、一点をもぎ取った。すると、そこからチームは息を吹き返したように士気が高まり、試合が随分と面白くなっていった。終始シーソーゲームが続き、最後に私たちのチームが立て続けに得点を決めることによって、結果は11対10でこちらのチームが勝利した。

---

---

勝利の喜びを味わった瞬間に、今いるグラウンドが高校のグラウンドに変わった。そこでも私はサッカーをしていたが、その時のメンバーは高校時代の友人たちだった。この試合をグラウンドの片隅で見っていたのは、高校時代のある体育教師だった。試合が終わると、私たちはその教師の話聞きにいった。

その教師は随分と権威的な話し方をするものだから、私は声を荒げて、その教師を罵った。単に罵るといっても、何も反論ができないぐらいに理詰めでその教師を罵倒し続けた。その教師は唾然としたままその場に立ちすくんでおり、その姿を見ながら私はその場を後にした。その場を後にしながら、教職という社会的に見て極めて重要な職業に就いている多くの教師の未熟さに絶望的な気持ちになった。

だがそうした思いとともに、そうした未熟な教師から受けた数々の心の傷を乗り越えることで強靱な精神が形作られていくこともあり得ると思った。実際に自分はそうした人間だということにその時に気づいた。しかし、生徒の心に傷を残し、生徒が持っている可能性を抑圧するような教師の存在は社会的には害悪なのではないか、ということ絶えず考えていた。そこで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、私はカリフォルニア州の大きなショッピングモールにいた。そのショッピングモールは変わった作りになっており、構造が少々複雑であった。地図を見てもどこからどのように目的地に行けばいいのかわからなかった。ちょうど私は買い物を終えたところで、ショッピングモールに併設されている駅に向かおうとしていた。

列車の切符を近くに置かれていた機械を通じて購入したのだが、肝心の駅の場所がいまいちよくわからなかった。厳密には、駅の場所はなんとなくわかるのだが、そこへ行く道筋がわからなかった。地図を再度確認し、おそらくこの道を行けば駅にたどり着くだろうという直感を頼りに歩き始めると、ショッピングモールの高層階に到着した。そこはとても薄暗く、地下鉄のプラットフォームの雰囲気が漂っていた。

見ると私の直ぐ近くに、巨大な滑り台があり、滑り台の終着地点を眺めると、かすかに駅のプラットフォームらしきものが見えた。私はその滑り台を滑っていくことを決意し、ゆっくりと滑り始めた。すると後ろ

---

から、威勢のいい声が聞こえてきた。耳を傾けると、英語で「学校教育よさらば！」と叫ぶアメリカ人の若者が滑り台から勢い良く滑り落ちてきた。見ると、彼は高校生ぐらいだった。

彼が通り過ぎて行った後に間髪を入れず、後に続く形で、二人のアメリカ人の高校生が「学校教育よさらば！」と叫びながら、嬉しそうな笑顔を浮かべて滑り台を滑り落ちてきた。私は彼らの邪魔になることを避けるために、一旦滑り台の脇の手すりにつかまって、彼らが滑り落ちていくことの邪魔にならないようにした。

三人の高校生男子が滑っていく背中を眺めていると、この滑り台を滑ることは、高校を中退することの儀式なのだと知った。それに気づいたとき、自分自身が学校教育からの呪縛から解放されたのは20代の半ば、あるいは30歳を前にしてのことだったように思った。一方で、現代人の多くは成人になった後も学校教育の呪縛から抜け出せていないことに気づかされた。そのようなことを考えながら、若くして学校教育から脱却していった彼らのことを再度思った。

彼らは高校中退という道を取ることでしか学校教育の呪縛から解放されなかったが、そもそも学校教育が私たちを抑圧するということがそのものがおかしな話ではないか。そうした考えを持ちながら、私も滑り台を最後まで滑り落ちた。するとそこには、ヒスパニック系の男性が立っており、見ると彼は物乞いのようなようだった。彼の横を通り抜けようとした際に、私の真ん前に立ってカネをせがんできた。

私は、物乞いの男性が手に持っている缶にカネを入れるふりをした。すると、あたかも本物のお金が缶に入ったような音が鳴り、その物乞いは満足そうな表情を浮かべていた。その表情を見ながら私は足を進めてプラットホームの方に向かおうとしたら、急に光が差し込んできて、そこは結局さっき自分が買い物をしていた店につながる広場であることに気づいた。そこで夢から覚めた。フローニンゲン:2018/10/21(日)07:29

### 3296. 誕生日だった今日

つい今しがた、今朝方見ていた夢について日記を書き留めていた。それを書き終えた後、今日の日付を日記に入力した瞬間に、今日は自分の誕生日であることに気づいた。近頃私は、現在の西暦を確認しなければ、自分の正確な年齢がわからなくなっている。おそらく外側の時間に従っ

---

て生きることを極力避け、出来るだけ内側の時間に寄り添う形で生きていくことを続けた結果として、そのようなことが起こっているのだと思う。

現在の西暦から自分が生まれた西暦を引き算しなければ自分の年齢がわからなくなっているというのは奇妙なことかもしれないが、私はそれが正しい生き方であるとどことなく確信している節がある。

暗闇に包まれたままの空を眺めながら、自分の誕生日を一人静かに祝った。祝い方法は至極単純なものであり、この日に誕生したのだということに気づくことだった。何か特別なことをして祝ったわけではなく、単にそれに気づくことが最大の祝いであった。

このところ私は、近い将来に欧州の地で永住場所を見つけ、その地で生活を続けていくことになる予感がしている。それは予感であると同時に、自分の希望でもある。

昨夜も考えていたが、やはり私はもう日本で生活をするのではないのだと思う。いつもこの考えが浮かぶたびに、人生には何があるかわからないと思うが、諸々の理由によって自分は日本で生活することはできないのだと思う。

来年仮にアメリカに戻ることができたら、そこで数年ほど暮らし、その後はスイスのドルナッハで生活を営もうと思っている。だがそこが永住の地だとは思えず、おそらく私は再びオランダに戻ってくるか、北欧諸国のどこかに移住し、そこで永住の地を見つけるような気がしている。

現実的な話をすると、日本人の私が欧州で永住権を取得するために好都合なのは、やはりオランダである。今度はアムステルダム郊外のどこかで静かな生活を営みたいと考えている。そのようなことを昨夜就寝前に考えていた。それともう一つ、「この世界のどこで何をしようとも、自分は独りである」ということについても考えていたように思う。そのテーマに対して、どのような観点からいかように考えを巡らせていたのかはもう覚えていない。

究極的な孤独性に行き着いた後に、何か花が開いたかのように、ごくわずかな人たちと深い付き合いをしながら生活を営んでいる自分の姿が見えたような気がした。仕事においても私生活においても、そうしたごく少数の人たちが常に自分を取り巻いている姿が見えていたように思う。

---

時刻は午前八時を迎えようとしており、ようやく空がダークブルーに変わりだした。朝日が照り始めるのはもう少し後だろうか。

今日は誕生日であるということを再度思い出し、別の仕方でこの日を祝おうと思った。それは、読みに読み、書きに書き、作るに作るという、これまでと同じ生活を送ることである。自分にできる探究活動と創造活動に打ち込むことが自分の人生に与えられた役割であるのだから、それを普段と変わらずに行うことが、自分の誕生日を祝う最良の方法であるにちがいない。フローニンゲン:2018/10/21 (日)07:45

### 3297. 今朝方の夢について思うこと

今朝方に見ていた二つの夢は、どちらも共に印象に残るものだった。一つ目の夢の主題は、権威に対する反発というものであり、これは私の夢の中で頻繁に見られる主題だ。興味深いのは、この主題に関する夢を見るときには常に、自分の内側にある巨大なエネルギーを感じるということである。それは確かに荒々しく、攻撃的なものであることに間違い無いが、どこかそれは自分を根源的に突き動かしているエネルギーのようにも思える。

そのエネルギーの表面的な姿は暴力性であると思われるが、その根源には正義心が横たわっているように思う。もしかすると自分の内側には、社会正義を実現しようとするような途轍もなく大きなエネルギーが流れているのではないかということにはたと気づかされた。

権威に対する反抗を示す夢は形を変えて本当に度々現れる。その夢を思い出し、書き留めるという客体化実践を続けていくことによって、ようやくその夢の背後にある事柄が見えてきた。

毎回この主題に関する夢を見た後には、大きなエネルギーを発散した開放感があったのだが、今はそうした開放感に浸るというよりもむしろ、この夢の背後に隠れた真実を冷静に見据えるようにしている自分がいる。また、「学校教育よさらば！」と叫びながら滑り台を勢い良く滑っていった数人のアメリカ人の高校生たちの姿を思い出す。ここにも、今の私の関心が如実に投影されているように思える。

---

自分の深層意識の中に、現代の教育が抱える問題に対する関心があったから自分が教育哲学に関心を持ち始めたのか、あるいは教育哲学に関心を持ち、現代の教育が抱える問題に対する意識が強く芽生えてきたからそのような夢を見たのかは定かではない。因果関係を特定することはとても難しく、ひょっとすると双方向的な因果がそこに存在しているのかもしれない。

今日も教育哲学に関する書籍を読み進めていこうと思う。昨日、今道友信氏の芸術論に関する書籍、孔子の教育論に関する書籍、高橋巖氏のシュタイナー教育に関する書籍、長田新氏の教育哲学に関する書籍を含め、合計12冊ほどの和書を注文した。それらはすべて実家に届くようにしている。今度一時帰国するのは、おそらく来年の夏、およそ10か月後になると思うため、自分が帰るまでは、美学に関する書籍は父に読んでもらい、音楽に関する書籍は母に読んでもらうと思う。

先日ボストンの古書店で購入した20冊弱の書籍、そして数日前にフローニンゲンの古書店で購入した10冊ほどの書籍を一読したら、スティーブ・サイデル教授から参考にと良いと教えていただいた教育哲学者の書籍を10冊から15冊程度購入したいと思う。フリードリヒ・シラー、スザンヌ・ランガー、エリオット・アイズナー、マキシン・グリーンらが執筆した書籍を読むことは今から楽しみだ。

今日は、昨日から読み始めているネルソン・グッドマンとキャサリン・エルギン教授の共著“Reconceptions in Philosophy and Other Arts and Sciences (1988)”の続きを読んでいく。昨日読んだ章が大変面白く、随分とメモを取った。今日もそうした実りある読書が実現されればと思う。フローニンゲン:2018/10/21(日)08:11

### 3298. 誕生日のお祝いと老いの美

時刻は午後の二時を迎えた。ちょうど今仮眠から目覚め、これから午後の取り組みに従事していく。

早朝は随分と冷えており、今もまだ寒さを感じる。ヒーターをつける時期がいよいよやってきたことを実感する。

昼食前に、書斎の窓の近くに一羽のスズメがやってきた。カサカサと音がするのでそっと近づいて見てみると、一羽の愛らしいスズメがいた。気づけば今日は私の誕生日であり、スズメが祝いに来て

---

くれたのかもしれないと思って少し気分が明るくなった。スズメ以外にも、フローニンゲン大学から誕生日を祝うメールが届き、そこには一遍の詩が添付されていた。

オランダ語の方ではなく、英語に翻訳された方を読みながら、フローニンゲン大学で過ごした二年間について回想していた。その詩の中で謳われていたように、大学で学んだことを仮に忘れてしまっても何ら問題はなく、大学で学んだことをは知識を超えて一つの尊い経験として自己の中で生きていくだろう。

これから何度大学と大学の外に行き来するのかわからないが、大学で得られる事柄は知識よりも重要な事柄があるにちがいない。それは自分自身の固有な経験に他ならず、そうした経験を積むことによって初めて、自己は深まりを見せていく。

そのようなことを考えていると、精神エネルギーの若々しさは、逆に自己の成熟を深めてくれるのではないかという考えが浮かんだ。私の周りには健康で精力的だと思う人たちは一様に、はつらつとしたエネルギーを持っている。そうした人たちを見ていると、大学で学び直しているかどうかは問わず、絶えず新たなことを学んでいるという共通性に気づく。学ぶことはもしかすると、若い精神エネルギーを生み出してくれるのかもしれない。一方で現代社会には、老いた精神エネルギーを持ち、自己が未成熟な人が多いのではないかという危惧もある。そうした人たちを観察してみると、どうも日々の生活の中で学ぶ喜びを感じられていないようだ。

絶えず学び、絶えず自己を深めようとする事の中に、何か若さの秘訣のようなものがあるように思えてくる。そして若々しいエネルギーを持ちながら自己を深めていくというのは、老いることの美であり、老いの特権であるように思える。

書斎の窓から見える街路樹は紅葉が進み、もう裸の木々もいくつかある。これから長く厳しい冬がやってくるが、自分の内側に流れているはつらつとしたエネルギーを携えて、自分にできる取り組みを日々進めていこうと思う。絶え間ない探究活動と創造活動。今日の午後も喜びの感情の中でそれらの活動に従事していく。フローニンゲン:2018/10/21(日)14:21

Energetic shooting stars are running and breaking the dark of night. A bright light comes from the break of the darkness. Groningen, 20:58, Sunday, 10/28/2018

### 3299. 意識の発達段階と時空間の認識

今日も気がつけば夕方を迎えた。誕生日である今日は日曜日に該当し、フローニンゲンの町はとても静かであった。

先ほど、不規則に落ちていく枯葉を眺めながら、時間がゆっくりと過ぎていくのを感じていた。いや、枯葉を眺めている時の自分は時間など感じていなかった。

今年の誕生日から今日の誕生日にかけての時間も、本当に一年という時間がそこに横たわっていたのかと疑ってしまうほどに、自分の時間感覚が変容している。欧州での生活は三年目を迎え、まさか私はオランダのこの地で三回も誕生日を迎えるとは思っていなかった。私の人生において、この地で三回ほど誕生日を刻んだという事実とその期間における経験が消えることはないだろう。

今日は午前中から夕方のこの時間帯にかけて、随分と読書を行った。キャサリン・エルギン教授とネルソン・グッドマンの共著の書籍、教育思想家のフローベルの書籍を読んでいた。そうした読書に並行してふと、スイスの発達心理学者ジャン・ゲブサーについて調べ物をしていると、時間と意識の発達段階の関係性について指摘していたことを発見した。実はつい先日、協働者の方とオンラインミーティングを行っている際に、これと同じ話題が取り上げられていたことを思い出し、この偶然には驚いた。

ゲブサー曰く、厳密には意識の発達段階の高度化と時間及び空間に対する認識の間には密接な関係があるとのことである。ここで細かくは論じないが、例えば、ゲブサーの段階モデルで言うところの合理的な知性を司る意識段階においては、線形的な時間の流れ、かつ空間認識としては自己を箱に押し込むかのような特性があるとのことである。その段階の一つ前に存在する神話的合理性段階においては、時間意識がサイクルをなしており——これは季節的な行事の信仰と関係しているだろう——、空間意識としては自己が文化的空間に閉じられた感覚があるという。

---

こうした記述を眺めていると、それらはおそらく実証的なものというよりも、推論的なものだと思うが、個人的な体験からは随分と納得がいく。各発達段階と時空間の認識の細かな対応についてはまだ深く考えていないが、大枠として、意識の発達段階と時空間の認識は密接なつながりがありそうだということを把握する。

この三年間、欧州で暮らす中で自らが少しずつ変容を遂げ、それに応じて新たな時空間認識が芽生えていることに気づいている。このテーマについては引き続き考えを深めていきたい。

今日はエルギン教授とグッドマンの書籍“Reconceptions in Philosophy and Other Arts and Sciences (1988)”からも得るものが非常に多かった。芸術鑑賞や芸術創造を通じてしか涵養しえない認識世界があることがわかり始めているが、とりわけ科学的な認識方法との差がどのようなものなのかについて、認識論の観点から丁寧に探究をしていく必要があるようだ。

芸術によってしか開かれぬ認識世界があるというのは、芸術教育の価値を論じる際にも重要なポイントであり、自分の理解を深めていくためにも、明日からは以前に購入したグッドマンの“Languages of Art (1976)”と“Ways of Worldmaking (1978)”を読み進めていこうと思う。

芸術理解と芸術教育の観点から認識論を学んでいくことの喜びが日ごとに増していることは嬉しいことである。自分の関心テーマに引きつけて、認識論という哲学領域を開拓していきたいと改めて思う。フローニンゲン:2018/10/21(日)17:27

#### No.1358: The Elixir of Immortality

I encountered the situation in the dream last night that I drank the elixir of immortality. What awaits us after we overcome the fear of death and immortality? Groningen, 07:29, Monday, 10/29/2018

### 3300. 新たな自己と新たな意識

今朝は六時に目覚めたのだが、結局体を起こしたのは七時を過ぎた頃だった。いつも就寝は午後十時と決まっているのだが、興味深いことに起きる時間に関しては変動がある。六時に目覚めた

---

時にも爽快な感覚があったのだが、寝室の温度が下がっていたためか、すぐに起き上がることができなかった。明日からは一度目を覚ましたら、そこで起床するようにしたい。

時刻は八時に近づいてきており、今日もこの時間帯は少しばかり雲が空を覆っている。今日は雨は降らないようなのだが、明日はどうやら小雨が降るようだ。

誕生日から一夜が明け、いつもと同じ一日がまた始まった。昨日は普段と変わらない形で静かに一日を終え、そして今朝に至った。昨夜から今朝にかけて、自分はまた新たな誕生を経験したのだと思う。今日からはまた新たな自己として日々を送っていく。厳密には、日々自己が更新をされていく形で生きて行く。

これからまずは過去に作った曲を編集し、その流れでバッハの四声のコラールに範を求めて一曲作る。ここしばらくは夜にバッハを参考にすることが多かったが、昨日から再び朝にバッハを参考にすることにした。絵画作品を鑑賞するかのよう、様々な種類の楽譜を眺めていくこと。それにより、音楽的な感性を養っていくことをしたい。

まずは優れた楽譜に目を慣らしていき、視覚的な情報を他の身体感覚に置き換えて取り入れていく。棋士が優れた棋譜を参考に学習を進めていくのと同様に、優れた楽譜を参考に作曲の学習を進めていく。そこでは継続が大事であり、日々緩やかに、それでいて着実に学習を進めていく。楽譜を意識的に眺めることは非常に大切な学習になるだろう。

昨日は、“Composing for Japanese Instruments (2008)”という書籍を読み進めていた。この書籍では、日本の伝統楽器が紹介されており、各楽器の音域や演奏ポイントなどが記述されている。

今は日本の伝統楽器を演奏することや、それらの楽器を組み合わせて作曲することを行う予定はないが、いつかそうした日がやってくるかもしれない。昨日は、本書の中に掲載されている楽譜を眺め、一つ一つの楽譜の中に体現されている独特のリズムやメロディーを感じることに喜びを見出している自分がいた。今日から再び作曲の実践および学習に関して、少しばかり新たな意識を持って取り組みたいと思う。いや、日々新たな意識を持って取り組みを継続していきたい。フローニンゲン:2018/10/22(月)08:09

---

No.1359: Dance of a Wintry Sky

Seeing the outside of the window, I can perceive a wintry sky to dance. I'll read the rest of "The Foundations of Aesthetics (1966)." Groningen, 14:33, Monday, 10/29/2018